

事業の背景・目的

チュウヒ、ベッコウトンボをはじめとする湿地・草地の生物多様性の保全に関する持続可能な手法の確立を目指す

響灘ビオトープは工業地帯にありながらも絶滅危惧に指定される複数の生物が生息している。響灘ビオトープの経年における生態系や周辺環境の変化により生態系における質の劣化が懸念される中、チュウヒ、ベッコウトンボをはじめとする湿地・草地の生物多様性の保全に関する持続可能な手法の確立を目指すもの。

具体的には、生物調査を踏まえた湿地・草地の生態系保全と市民参加による生物多様性の保全、ネイチャーポジティブを推進するための啓発を手法とする。



響灘
 ビオトープ
 全景

事業の内容

生物調査を踏まえた湿地・草地の生態系保全と市民参加による生物多様性の保全のための啓発を手法とする

ア 調査事業

【生活行動の把握】
 モニタリング調査により、当該地に飛来するチュウヒの生活行動を明らかにし、保全の取り組みに反映させる。



ヒメガマに覆いつくされ
 水面が見えなくなった湿地

イ 保全事業

【良好な植生管理】

湿地については、ヒメガマの遷移が進み減少するヨシ原の整備(池の中のヒメガマの伐根、高密度化するヨシの伐採、水際のクズ伐採等)を行う。また、チュウヒが小動物を採餌する草地は、セイタカアワダチソウ、クズを除草して小動物が生息しやすいヨシやチガヤへの遷移を進める。

ウ 啓発事業【気づき】

調査、保全、普及など様々な場面での人材を発掘するための啓発を地元Jリーグクラブ「ギラヴァンツ北九州」などと協働し、野鳥観察地を巡って生き物について学ぶスタンプラリーを実施。
 また、国立環境研究所の五箇公一先生を講師に招き、講演会(右チラシ)を開催。



得られた成果

ア 調査事業

- チュウヒは、前年度の調査でチュウヒの行動圏を観察し、園外の営巣場所をほぼ特定できた。今年度の調査でもそれを裏付ける結果を得た。
- ビオトープ園内がチュウヒの採餌場所の一つであることも再確認でき、重要な生息場所であることが確認できた。

イ 保全事業

- ヨシ原(チュウヒ営巣地)のヒメガマの伐根、高密度化するヨシの伐採、水際のクズ伐採等を行い、湿地を再生した。
- 草地は、除草により小動物が生息しやすいヨシやチガヤへの遷移を進めた。
- 湿地再生は、ベッコウトンボ繁殖に、草地管理はカヤネズミの繁殖に寄与すると考える。

ウ 啓発事業

- 北九州市内で野鳥が見られる施設の協力を得て、5か所のうち3個の野鳥スタンプを集めて賞品に応募できるスタンプラリーを実施。
- 北九州では直接聞く機会のない五箇公一先生の講演会は好評であった。

総合

・本取り組みのフィールドである響灘ビオトープが「自然共生サイト」(令和5年前期)に認定された。